

「私」とは誰か？ —日本で劇場公開される 『復讐は私にまかせて』（2021年）



映画『復讐は私にまかせて』のインドネシア版ポスター（左）と日本版ポスター

京都大学東南アジア地域研究研究所 准教授
西 芳実

●8月20日から全国順次ロードショー公開

ホラー映画『踊り子村のKKN』（2022年）の観客数が900万人を超えてインドネシア映画の最多観客数の記録を更新したことがインドネシアで話題になった頃、日本でもインドネシア映画の劇場公開が発表された。2021年ロカルノ国際映画祭で金豹賞を受賞した『復讐は私にまかせて』（原題：Seperti Dendam, Rindu Harus Dibayar Tuntas/Vengeance is Mine, All Others Pay Cash）が2022年8月20日から東京のシアター・イメージフォーラムほかで全国順次ロードショーされる。

『復讐は私にまかせて』は同名の小説（2014年刊行）の翻案である。原作者のエカ・クルニアワンは1975年に西ジャワ州タシクマラヤで生まれ、小説『美は傷』（太田リベカ訳）で長編デビューし、プラムディア・アナンタトゥールを継ぐと目される作家である。監督のエドウィンは1978年に東ジャワ州スラバヤで生まれ、インドネシア華人の心象を巧みに表現した映画『空を飛びたい盲目のブタ』（2012年）で長編デビューし、高校生男女の恋愛とデートDVを描いた『ひとりじめ』（2017年）でインドネシア映画祭最優秀監督賞を受賞した気鋭の監督である。

●勸善懲悪のアクション・ラブロマンス

『復讐は私にまかせて』は、1980年代から1990年代前半にかけてのジャワを舞台に、喧嘩好きで怪我の絶えない毎日を送る青年アジョ・カウィルと、採石場経営者の用心棒だった女性イトウンを主人公とするアクション・ラブロマンスである。

物語は、出会い（喧嘩の強い男女が会って夫婦になる）に始まり、別れ（妻が夫との性交渉なしに妊娠して夫が妻の元を去る）を経て、再会（夫が妻の元に戻る）までが描かれる。

幼少期のトラウマで勃起不全になったアジョは命知らずの喧嘩に明け暮れていた。あらゆる護身術を身につけたイトウンと出会い、2人は恋に落ちる。イトウンはアジョが性交渉できないことを受け入れた上で結婚する。しかしアジョはイトウンから妊娠を告げられ、絶望して家出する。アジョは元軍人の依頼を受け入れて殺人を犯し、投獄される。アジョは刑期を終えるがイトウンのもとに帰らず、トラック運転手となって放浪の旅に出る。一方、一人で出産したイトウンは子どもをアジョの家族に預け、アジョのトラウマの原因を作った犯人を捜す。アジョは、旅先で出会った謎の女との出会いを通じてイトウンへの愛を確信して家に帰る。

●男らしさと女らしさに藻掻く主人公たち

アジョとイトウンはどちらも幼少期に性的暴力を受け、アジョは自分の男性性に、イトウンは自分の女性性にかかわるトラウマを負っている。

アジョが勃起不全になった原因は、幼少期に性的暴力の現場を目撃し、自分もその性的暴力に加担させられたためである。弱者に対する暴力的な抑圧の起源が男性性の顕示欲にあると考え、暴力的な抑圧に加担したくないという意識が働いて、自分が父になることを受け入れられないのが勃起不全の原因

なのだろう。男らしくありたいけれど父になる力を奪われたアジヨは、強い相手を求めては命知らずの喧嘩に明け暮れる。

アジヨではない男性の子を宿してアジヨに家出されるイトウンは、夫以外の男性の子を妊娠した女性は社会の秩序を乱す存在とされ、女性もその子も社会から排除されるというインドネシア社会に古くからある問題を体現している存在である。インドネシア映画はこの問題を繰り返し取り上げてその克服を試みてきた。アジヨとイトウンがいったん別れなければならなかったのは、この問題が今なお克服されていないことを反映している。

それでも2人は再会してハッピーエンドを迎える。ここには、直接血を分けていなくても親子になれるという考え方によってこの問題を克服しようとする作り手たちの思いがうかがえる。

●「あの世」がもたらすハッピーエンド

アジヨとイトウンの個人的な復讐が誰によってどのように果たされたのかは実際に作品を見ていただくとして、ここでは2人のハッピーエンドの裏に隠された大きな悪への復讐について考えてみたい。

2人の再会を導いたのはジュリタという謎の女性である。ジュリタはイトウンが幼少期に過酷な経験をしていたことをアジヨに伝え、アジヨのイトウンへのわだかまりが解ける。ただしジュリタの働きはそれで終わらず、アジヨたちの災いの原因を作った陰の有力者を殺す。

地中から姿を現してトラックの看板の絵の中に戻っていったことからわかるように、ジュリタは「この世」の存在ではない。「この世」と「あの世」にはそれぞれ異なるルールがあり、それが裏と表の関係と並存している。表の世界のルールで罰せられない悪に対して裏の世界の存在が成敗することで復讐が果たされ、『復讐は私にまかせて』の世界に勧善懲悪がもたらされる。

●「私」とは誰か

1980年代前半、インドネシアでは世間を震撼させた一連の「謎の銃殺」事件が起こった。町のならず者たちが何者かに銃殺される事件で、犠牲者は数千人にのぼった。軍・警察が暗殺部隊を組織していることは公然の秘密だった。アジヨの養父はいち早くならず者稼業から足を洗い、入れ墨を隠して銃殺を免れた。

ジュリタがしたことは、表の社会のルールでは裁かれない悪者を裏の存在が成敗するという意味で「謎の銃殺」事件と同じ仕組みに見えるかもしれない。しかし、「この世」の裏の存在が行った超法規的な殺人と違い、ジュリタは「あの世」の存在であり、「謎の銃殺」事件に限らず軍・警察のために非業の死を遂げた犠牲者たちを代表している。

この映画の英語タイトルの「Vengeance is mine」は聖書に記された神の言葉で、一般に「復讐するは我にあり」と訳される。「我」とは神のことで、人間は自ら復讐せずに神の怒りにまかせよという意味である。邦題が「復讐は私にまかせて」とされたことで、「私」が誰を指すのかを考える楽しみの幅が広がった。それはイトウンかもしれないし、神かもしれない。あるいは、軍・警察のために非業の死を遂げた犠牲者たちが「あの世」の存在として復讐を果たすということかもしれない。

西 芳実 (にし・よしみ)

京都大学東南アジア地域研究研究所・准教授。1993年東京大学教養学部卒。博士(学術、東京大学大学院総合文化研究科)。東京大学助教などを経て2011年に京都大学に着任。専門はインドネシア地域研究。著書・共編著書に『災害復興で内戦を乗り越える』『被災地に寄り添う社会調査』『歴史としてのレジリエンス』(いずれも京都大学学術出版会)のほか、インドネシアの国民的課題とそれへの対応の歩みを映画から捉える最新刊に『夢みるインドネシア映画の挑戦』(英明企画編集、2021)がある。映画で東南アジア社会の課題共有をはかるシネアドボ・ワークショップにも取り組む。



『夢みるインドネシア映画の挑戦』(英明企画編集)